

拡張現実感を用いた江戸文化を伝える ストリートミュージアムの研究

Study of StreetMuseum to Convey Edo Culture using the Augmented Reality

学籍番号：201521651

氏名：喬 丹

Dan QIAO

近年、訪日外国人旅行客が増加している。訪日外国人の多くは中国人で、東京を訪れる。さらにリピーターとなる訪日中国人が増加しており、リピーター客は買い物ではなく、歴史・文化の見学や体験へ関心を高めている。江戸時代に幕府が設置されて以来積み重ねられた豊かな東京の文化を訪日中国人に伝えることは、今後の課題の一つである。一方、拡張現実感を応用して、遺跡や歴史的建造物といった歴史的絵画資料や記録写真・映像等を重ね合わせ、当時の様子を伝える鑑賞支援の取り組みが行われている。このような屋外型文化情報提供技術は、ストリートミュージアムと定義されている。これを応用し、江戸時代の娯楽文化を象徴する浮世絵を拡張現実感で提示することで、江戸時代へのイメージを持ちにくい外国人に対して日本の歴史や文化を容易に伝達できると考えられる。

本研究では、訪日中国人の江戸時代の歴史や文化に対する理解及び興味を向上させるために、拡張現実感を利用し、歴史的な空間に浮世絵を重ね合わせることで、江戸時代の人々の暮らしや文化を伝えるストリートミュージアム鑑賞支援コンテンツを提案する。対象空間には、文化的・商業的空間であるが、江戸時代の風俗や娯楽の面影が少ない、浅草寺を選定した。提示資料には歌川広重が描いた「浅草金竜山奥山花屋敷」等から、服装等の違いがよくわかる浮世絵を9枚選定した。提示資料は6つのスポットに設置した。浮世絵の提示に加えて、歌舞伎や見世物見物などを解説した中国語と日本語のナレーションを導入した。本研究では、訪日中国人に対するストリートミュージアム鑑賞支援の効果を検証するために、中国人10名を対象に、鑑賞体験と5件法及び自由記述の質問紙調査による評価実験を行なった。比較検討のために、日本人10名に対しても同様の評価実験を行なった。

実験の結果、中国人協力者からは全項目で4点前後の高い評価をし、江戸文化の理解に関して日本人とほぼ同程度の評価を得た。自由記述の回答では、江戸時代と現代の文化の違いや、人々の生活・風俗への理解に対する肯定的な記述が多く見られた。

以上より本提案コンテンツは、訪日中国人に江戸時代の歴史や文化に対する理解を深め、興味の喚起に効果があることが明らかになった。

研究指導教員：西岡 貞一

副研究指導教員：綿拔 豊昭